

## 生録は今も昔も変わらない

生録会参加者

小後摩 幸雄

### はじめに

自身にとっても生録（ナマロク）は 1970 年代にはじまる。昔は生録をやっている連中を「音キチ」と呼んだものだ。当時の王道はもちろん 2 トラ 38 のオープンリールデッキ。今から考えれば生録は恐ろしく重労働だった。



左は 1976 年 2 月に軽井沢で行われた新日本フィルを迎えての 3 日間に及ぶ生録会の模様。マイクセットはオーディオラボ、SONY、新日の 3 つ。参加者はこのラインのいずれかを選択し録音するというもの。

当時の録音記には、いつか「自分のマイクを立てたい」と述べられている。今から 40 年前の録音会の中には、プロのセットをラインで受けて録音するのも生録だった。

### 甦った生録会



ここまで録音は長くテープを使った記録だったが、メモリーの普及によって生まれた現在の録音機。そこに突如甦ってきたのが生録会だった。それもプロの演奏を前に自前の用意で録音出来るとは、アマチュアにとって夢の実現でもあったわけ。それだけでなく、オーディオ協会の校條会長から「継続は力です」と挨拶があるなど、熱い思いを我々の前で披露、期待も大きく膨らんだ。

紹介するのは、先日富士ソフトアキバホール 5F での生録会を纏めたアルバム。アマチュアにとって、もうひとつの喜びはオリジナルアルバムを作れるようになったことだろう。

昔は録音してもレコードには簡単に出来なかったので、録音したテープで聞くしかなかった。遠い過去を思えば夢のような時代になった現在、レコーダーが充実すれば生録会が甦るのは必然だったのかもしれない。

### 生録会での様子

生録会に行けば多少気になるのが、参加者の用意だろう。会場で準備していると、録音話やマイクへの質問など立ち話も聞こえてくる。当初、自作のマイクもあれば超有名な高級マイク、はたまた昔憧れたマイクも顔を出したりとバラエティーに富んでいた。



これも回を重ねるごとに、より音楽録音に傾く傾向になってきたように見受けられる。やはり、前列に陣取る者の多くはレコーダーとマイクロホンが別である。これは音質だけではなく、十分なレベルや質を得たいという意味もあるだろう。難しいのは会場の広さと演奏者との関係、またハンディーレコーダーと本格録音との差、更には観覧者への配慮といった点をどこまで平等に保てるか。今時の生録会にあつての問題でもある。

## レコーダーの貸し出し

過去にない新しい事として、レコーダーの貸し出しが受けられるようになっている。生録は昔から自前が原則、屋外ではバッテリーや風対策も必要だったから、これは有り難いこと。最新機を借りて試すことが出来るし、情報はメモリーで持ち帰れると手軽だ。中には自分の用意と借りたレコーダーで楽しんでいる人もいる。この実際に試せるという点をもっとPRすべきだと思う。むしろ、ハンディーレコーダーの実力を体験するための生録会だって必要ではないのか。

## 生録コンテスト



そういえば過去の歴史には生録会だけでなく、生録コンテストというものもあったはず。その証拠がコレ。

凄いののは荻昌弘・菅野沖彦氏など、そうそうたる面々が喧々譁々の末、各賞を決めるといった具合のコンテストだった。

表彰は赤坂・高輪のプリンスホテルに全国から集まったというから、情熱からして当時は違っていた。

単なる生録会だけでなく、こういった企画をイベント会場で行うのも、生録普及にはいずれ必要になると思う。

## 生録は歩留まりが悪い



屋外で生録を続けている自分にとっての悩みは、一回の成果が非常に短いこと。

これは東日本大震災の被災地を走ったSL。総録音時間は100分だが、聞かせられる部分は20分ほどになってしまった。往復の交通費などを考えれば、非常に効率が悪いし時間が必要。その点で歩留まり100%の生録会は5000円出しても安い。だったら参加しない手はないだろう。

## 生録会に参加して思うこと

制約のある中であっても、著作権など難題を一步づつクリアしながら継続されていることは、ここまで順調であったと大いに評価しないとイケない。ただ、更に回を重ねるためには会場や演奏者を代えるだけでなく、より積極的に主催者側からステレオをどう録れるように仕向けたいのか、場所を含めてもっと戦略が必要だと思う。

録音席に着席した際、場合によっては演奏者から何を録って帰ればよいのか迷う時があるからだ。会場では場所が指定されるが、出来るだけ音源の近くにいたいもの。会場には貸し出しのレコーダーもあれば、マイクを立てる本格派もいる。そこに観客が入ると、演奏だけの力ではバランスを保てない場合がある。録音側はマイクで吸い取るように生録、それを自宅で再現したいと願う。これが録るだけの状況になってしまうと、演奏者の行為を台無しにするようで心苦しい。

過去の録音会では UDX シアターで行われたジャズバンドでは、部屋の大きさと演奏の規模はちょうど良かった。またアキバプラザ 7Fでのギターとウッドベース&バイオリンでは、楽器の質感も楽しめた。やはり、演奏規模と部屋の大きさ、距離は重要だと思う。PA の入る今回とパシフィコ横浜でのケースは、会場設定に反省点はありそうだ。



PA を避けるならこんな対応はどうだろう。ステージの前寄りに一定の範囲を設け区画、その枠にマイクやレコーダーをセット、自分たちも観客になって鑑賞する。これは今時のレコーダーを上手く利用し、演奏に応じた録音者への配慮をあらかじめ用意しておく考え。

これが可能ならこんな発想も出来る。貸し出し対象の無指向性マイクのレコーダー（画像）に工夫すると、バイノーラル効果が得られる。そこで演奏者を円形に配置して中心にレコーダーを集めれば、360度広がる音楽をヘッドホンで楽しめる柔軟な企画だって実現できる。要はこんな事も出来るというアイデアを交え、時には演奏者やメーカーをも巻き込んで、もっとステレオ録音への関心を一般に広める努力も織り交ぜてみてはどうかということ。また生録に興味ある人向けに、会場の様子をユーチューブや UST などで同時配信しても面白い。

## プロはどんな音？

生録会ではプロが別な録音をしていたりする。参加者はシンプルなステレオ録音だが、プロのセットはマルチマイクであることが多い。音楽の場合、プロの録音は色々な意味でも参考になるから、手っ取り早くプロのセッティングをラインから頂く手もある。録ったら即解散なんて一方通行ではなく、演奏者も交えた別会場でプロの音だって聞いてみたい気がする。



## 生録は後の記録

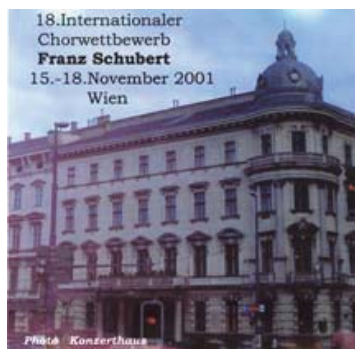


録音に限ったことではないが、一方では記録になるという側面を持つ。その時は感じなくても、後に環境が変化したりなど、時間の経過が思わぬ記録となる場合も少なくない。CD レコーダーの登場から 10 年ほど経つが、その間にも色々な出来事があった。これまでに制作した 117 作品から、少々昔を振り返ってみた。



花嫁列車は地元の方の熱心な誘いに応えた記録。驚いたのは初めて聞く発車の汽笛は三三七拍子。当時のジャケット作りはワープロで白黒だったため、これだけはカラーコピー版。

その後、お父様から手紙を頂いた。嬉しかったのは自分の録音から、これまでにあった数々の思い出を綴ってくれた文章であったこと。つまり、録音を通して先方の感性に何か働きかけられたことが、何よりも嬉しかったのだ。生録はありのままが基本だが、雰囲気や生々しさ、実在感といった要素を音にしておくことが大切だ。(1999 年)



この作品は京都府立加悦谷高校合唱部の歌声を記録したもの。合唱といえば NHK 音楽コンクールが有名だが、この学校はシューベルト国際合唱コンクール(オーストリア)に出場、世界一となる。この歌声を一言で語るならステレオ。場内の空気を一変させ、距離感を巧みに演出する歌声は見事。ダメもとで録音のお願いをすると、なんとウィーンに来て欲しいと返事が来た。気が付けばウィーンの会場に居たから不思議。この年は 9.11 テロの直後で出場が危ぶまれたが、見事世界一を持ち帰った。この作品にはひとつ仕掛けをしておいた。それは彼女等の 20 年後、30 年後のためで、アルバム作りには大切な要素。これを後に再び開いた時、一瞬で当時の思い出が甦ってくれることを願っている。(2001 年)

## 自己満足に陥らないこと

録音というのは、ただマイクを向けるだけでは聞いても面白くない。大切なのは高級マイクやレコーダーでもなく、ステレオをよく知ることであり、音源への深い関心、そして自ら音に対する感性を磨くことにある。聞き手に何かを訴えかける作品には、必ずステレオ再生で生きる録音をしているもの。昔から「やらせ」のない偶然が創る美しい音の輝きを録ろうと粘るのがアマチュア的心情。生録は自己満足だと諦めずに、作品作りを前提とする活動を通して本当の楽しさを発見して欲しい。

## 最後に

我が家に残っている録音機の残骸を集めてみた。それぞれに思い出がある製品だ。  
カセット時代は、FM 放送を録音するエアチェック用としても活躍していた。



奥の CF-1450 は短波付きで、200 時間は録音した。  
左はビクターの KD-2、ハンダ付けにもこだわった  
当時最軽量の 3.18Kg を自慢したレコーダー。右の  
TC - D5M はメタルテープが使えるデンスケで、音  
質も非常に良くなった。今やバッテリーは単三が主  
流、でもカセット時代は単一が基本だった。手前左  
は TCD-D100、この録音機が一番面白かった。せい  
ぜい一回 45 分だった録音が、一気に 120 分になる  
から成果もアップ。

そして現用のリニア PCM レコーダー、PCM-D1  
となる。

時代と共に機器や記録メディアなどが変貌しても、生録そのものは今も昔も変わらない。もち  
ろん、今だから出来る事もたくさんある。ただ問題なのは、時代が変われどアマチュアには時間  
が必要であること。これはどうしようもない。それだけに、失敗のない生録会の継続は貴重な恵  
みでもある。ソフトと合わせて自分の録音も音楽なんて、もっとオーディオが楽しくなるという  
ものだ。その楽しさを文化へと発展させるためにも、協力を続けていきたいと思っています。

## 筆者プロフィール

■ 小後摩 幸雄（おごま ゆきお）



1960 年生まれ。

10 歳の頃から FM 放送の録音（エアチェック）を始め、時の生録ブーム  
と NHK-FM の「朝の小鳥」を聞いたことが切っ掛けで、屋外録音の世  
界を知る。

2000 年 3 月、長岡鉄男のダイナミックソフトのページで自ら録音し  
た CD-R「日本爆音探訪」が紹介された。

Web では「八ヶ岳 夜明けの出来事」など音場録音が話題になる。

現在も屋外を中心に生録活動を継続中。